

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 76

2017年6月

Special to the Newsletter

トランプ大統領の演説スタイル —アメリカ国民を説得する破天荒な弁論術—

木下 民生

昨年11月の米国大統領選挙において、民主党候補のヒラリー・クリントン元国務長官が順当に勝利をおさめるだろうという全世界の指導者やメディアの予測を覆し、共和党候補でアメリカ議会議員経験も州知事経験もない、ニューヨークの不動産王ドナルド・トランプ氏が全世界を驚愕させて当選した。なぜトランプ氏が大方の予想を逆転させて大統領に当選できたのかを彼の独特な演説スタイルの見地から考察してみたい。

2016年アメリカ大統領選挙は11月8日に実施され、獲得選挙人数において、トランプ候補306人、クリントン候補232人と圧倒的な差をつけてトランプ候補が勝利した。全国民の得票数では、クリントン候補がトランプ候補を約300万票上回っていた。得票率では、クリントン候補48.04%、トランプ候補が45.95%であったが、これはほとんどの州で最も多く得票した候補がその州の選挙人全員を獲得するという「勝者総取り方式」(winner-take-all system)を採用しているためである。得票数で対立候補より少なかった候補が、選挙人獲得数で上回っていたために大統領に指名されたのは、ジョージ・W・ブッシュがアル・ゴアを破って当選した2000年の大統領選挙以来である。

トランプ政権の最初の100日

1月20日の就任演説をもって第45代トランプ大統領の新政権が発足し、4月29日で100日を迎えた。歴代大統領が政権発足後の「最初の100日」(the first hundred days)を特に最重要期と位置づけ、大統領選挙中の公約を果たすべく最優先課題の実現を目指すことに全力を注ぐのが習わしである。この表現の起源を創ったといわれるフランクリン・ルーズベルトは、後にニューディール政策と称された重要法案を矢継ぎ早に成立させた。ロナルド・レーガンは、大規模な減税を目玉として景気回復を提唱し、「レーガノミクス」という造語で評された。オバマ前大統領も米国史上最大規模の景気対策案を軌道に乗せた。トラン

ブ大統領は、「アメリカ第一主義」(“America First”)を旗印に「100日間で政策を実行する」と就任前から豪語してきた。政権発足数日後に、TPP離脱を宣言する大統領令(Executive Order)に署名し、続いてメキシコとの国境に壁を建設し始めたり、イスラム圏7カ国からの入国制限などに関する大統領令の公布を皮切りに奮闘してきたが、オバマ前政権の医療保険制度の廃止の頓挫も含めて公約をほとんど果たせていない状況である。

ギャラップ社の世論調査によると、トランプ大統領の支持率は、就任から1週間は45%前後であったが、その後は下降線を辿り、3月末には大統領選の公約であったオバマケアを廃止して代替の医療保険制度法案を可決しようとしたが、その取り下げが影響して35%と就任以来最低の支持率を記録した。その後も5月の半ばまでの週平均の最低は38%とかなり低かった。歴代の大統領の就任後4ヶ月目から半年の支持率平均が62%であるのと比較しても極めて低い。大統領前任者の就任年の5月の支持率が、バラク・オバマ65%、ジョージ・ブッシュ(子)55%、ビル・クリントン45%、ジョージ・ブッシュ(父)60%、ロナルド・レーガン68%、ジミー・カーター65%と比較するとトランプ大統領の4月から5月の平均支持率は38%であり1980年代以降で最低水準と言える。ちなみに、同時期にジョン・F・ケネディーは75%、ドワイト・アイゼンハワーは74%という高い支持率を誇っていた。

レトリックが息づく演説の伝統

米国民は、英国民と並んで重要な演説によって政治的方向性を決定する可能性が高い国民であり、政治家の演説手腕によって政治の行方が大きく左右されるという伝統を有している。紀元前4、5世紀に古代ギリシャにおいてプラトン、ソクラテス、アリストテレスらの哲学者兼雄弁家・弁論家が築き上げた弁論術であるレトリックを中世以降も継承した国がイギリスであり、スピーチ学科として最初に学問領域として体系づけた国がアメリカである。レトリックが一番研究され実践されている国もアメリカであり、ジョージ・ワシントン初代大統領の時代から息づくレトリックの伝統を守り続けている。アメリカの歴代大統領の演説が世界で一番説得力と影響力があると言われる所以でもある。リンカーン、ケネディー、レーガン、オバマなどの歴代大統領の名演説は世に広く知られている。従って、トランプ大統領がどのようなレトリックを展開してきたかを紐解くと、彼がなぜ政治経験ゼロでも、また国を統率する指導者としての品格が問われながらも国民を説得して大統領に当選したのかという不思議が解明されるかも知れない。

トランプ大統領の演説スタイル

大統領選挙中からトランプ氏の発言は乱暴かつ破天荒で、クリントン候補の粗探しに終始した。単刀直入で歯に衣を着せない演説スタイルは、良しにつけ悪しきにつけ思ったことを唐突に露骨に表現するもので、極めてユニークで前例がない演説スタイルであると内外の専門家間で評されてきた。

トランプ大統領の就任式は、アメリカ東部時間の1月20日正午から合衆国議会議事堂西正面にて挙行された。彼の就任演説は世界中に同時中継され、演説の内容やスタイルについては、後日主要新聞・雑誌やネットニュースなどで評論された。トランプ大統領の就任演説における各英単語の音節数や文章1文当たりの単語数という尺度によるリーディング難易度調査に基づいて、ある言語学者は、トランプ氏の英語は米国の7年生レベルの水準であり、第16代リンカーン大統領以来、歴代大統領の就任演説の下から5番目の低さであると評した。ちなみに、リンカーン大統領のスピーチは11年生（高2）レベルの英語であったという。また、カーネギー・メロン大学の調査によると、大統領候補選挙中の共和党のトランプ氏、クルーズ氏、ルビオ氏、民主党のクリントン氏、サンダース氏の5名の候補者の中で、単語・文法などの難易度においてトランプ候補のスピーチのレベルが最も低く、小学校6年生以下であった。

AP通信によると、演説スタイルに関しては、大統領選挙中もトランプ政権が発足して以降も一貫して、トランプ氏は単純明快な“great”“amazing”“very, very”“many, many”“super-duper”などの形容詞を多用し、“biggest”“toughest”“strongest”などの最上級用語を頻繁に使用してきた。彼は、演説においても記者会見においても、自画自賛を片時も忘れず、主題を論議している最中でも内容があちこちに飛び、しかしまた元の論点に戻ることができる才能を有している。

このように、小・中学生でも理解できる平易な語彙を意図的に連発することで国民を説得し、大統領選を制した候補者はトランプ氏だけである。大統領選においてはインテリ層からはあまり支持を得られなかったものの、特に労働者層からは幅広い支持を獲得し、彼らの期待に応える形で熱い演説を展開し、これまでの有力な政治家とは全く違った次元で有権者の支持を拡大していった経緯がある。結局、浮動票の率が高い労働者層の票を大幅に獲得したことが勝利の主要な要素でもあった。“America first!”や“I will make America great again!”に代表されるパンチの利いた短文を繰り返し強調したことも、演説に酔いやすいアメリカ国民の心を捉える意味においては有効な戦略であった。かつては、格調高い英語を演説で駆使することでアメリカの大統領としての威厳と雄弁家ぶりを誇示したものだ。しかし、トランプ大統領が披露し始めた全く新しい演説スタイルが、今後も有効かどうかは今後のアメリカ国民の判断に委ねられる。

古代ギリシャにおいてアリストテレスが提唱した説得様式は、エトス (ethos)、パトス (pathos)、ロゴス (logos) であった。人格と論理性に訴えるエトスとロゴスが大統領の演説の主流である中で、トランプ大統領だけが感情に訴えるパトスを主軸に置き、歴代の大統領が誰も頻繁に使わなかった前代未聞の語彙を多用し、ユニークな表情とジェスチャーとの相乗効果でアメリカ国民を説得してきた。「ロシアゲート」疑惑に揺れるトランプ大統領が、今後どのような演説戦略を展開するのか注目される。

(天理大学国際学部教授・天理大学アメリカス学会会長)

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (67)

新井 正一郎

New York (ニューヨーク州) アメリカ大陸におけるオランダの広大な植民地はニューネザーランドと呼ばれ、オランダ西インド会社の管理下にあった。この会社は早くも 1624 年、この広い地方の一部、つまりインディアンが Manahatin (アルゴンキアン族語、丘のある島) と称していた島 (オランダ人はニューアムステルダム島と呼んでいた) の先端に交易所としてフォート・アムステルダムをつくった。フォート・アムステルダムは後発展してニューアムステルダム植民地となった。当時はイギリスとオランダが制海権とアメリカの領土を巡って、何度も交戦していた時であった。1664 年、ニューネザーランドはヨーク公率いるイギリス軍により征服されると、イギリスのものとなった。イギリス国王チャールズ 2 世がニューアムステルダムを弟のヨーク公 (後のジェイムズ 2 世) に与えた際、その新植民地はヨーク公に因んでニューヨークと改められ、ニューアムステルダム島は再びインディアンの呼び名マンハッタンになった。その後第 3 次英蘭戦争 (1672 ~ 1674) の間、ニューヨークは一時オランダに奪回され、ニューオレンジに改名されたが、戦争後に結ばれた「ウェストミンスター条約」により、1674 年再びイギリス領になり、ニューオレンジはニューヨークに戻った。それからアメリカの独立戦争 (1775 ~ 1783) が始まるまでの約 100 年間、ニューヨークは西インド諸島と本国を結ぶ三角貿易の拠点としてイーストリバーに面した港の活動は次第に強まり、フィラデルフィアに次ぐ大きな海港都市となった。

しかし 8 年間続いた独立戦争で独立を宣言した新共和国の首都ニューヨークは、多事多端の季節を迎える。その理由としては、戦争中は、ニューヨーク市が戦場になったこと、そして独立戦争の最後まで、イギリス軍がそこを本部として占領し続けたことが考えられる。ところが戦争が終わり、イギリス軍が撤退すると、カナダや西インド諸島やオンタリオなどに逃走していた国教派の人々が商業の復興への期待からニューヨーク市へ戻ってきたために、その人口は戦争終結後わずか 2 年間で 1 万 2,000 から 2 万 4,000 に倍増した。1790 年、首都はフィラデルフィアに移るが、独立の政治家ロバート・モリスの指導のもとに、北米銀行がニューヨークに設けられたことやニューヨークの海運業で活躍していた商人たちによるオランダその他の国との貿易が次第に拡大したこともあって、同市は戦後の荒廃や不況から脱した。まだ苦しんでいるニューヨーク市の経済を助けたのが、始まりかけていた工業化と 1820 年代から 50 年代までの道路建設とエリー運河と鉄道建設などの大型公共投資だ。これらはニューヨーク市に多くの雇用を生み出した。1790 年から 1830 年代にかけて、ニューヨークに大量に入ってきた北ヨーロッパからの移民 (主としてアイルランド移民とドイツ移民) はこの雇用を求めての移動だった。ついでに記すと、移民の増加は驚嘆すべきものだったので、ニューヨーク州知事クリントンは、マンハッタンを将来人口が 100 万近くに急増しても住人が心地よく暮らせる都市に大改造しようとしたのだ。彼は審議会で 4 年かけて検討した測量士ジョン・ランデル作成の都市開発プランを公表した。それは碁盤の目状の近代都市ニューヨークの骨格となるもので、細長いマンハッタン島の開発された 42 丁目まで延びている南北に走る大幅のアヴェニューとこれと直角に交差する東西方向のストリートのみで構成された四角い新都市プランであった。前記のニューヨークに押し寄せてきた移民の波は、同市の産業化と近代化の促進要因で

あったことは、確かである。1850年代のニューヨーク市、とりわけマンハッタンには闇をあやつるガス灯に象徴される豊かな暮らし、賑わう商店街、ホテル、デパートといった華やかな世界があったが、一方ではスラム街やそこに集まる極貧者や乗合馬車が立ち往生する時に生じる怒声などが支配する影の世界があった。

この時期のニューヨークをこよなく愛した文人にウォルト・ホイットマン（1819～1892）という民主主義詩人がいる。ニューヨークの通りの影の世界にも惹かれた彼は、街路の怒声を民主的騒動と、与太者を「すばらしい輩」と呼ぶ。ロング・アイランドの小さな村の大工の家に生まれ、その後家族とともにブルックリンに移った少年期の彼は、付近一帯を歩き回ることがこよなく好きであった。当地での教員時代には、村の周囲を散歩し回り、独立戦争の時には、イギリスに占領されていた墓地をぶらついていて、1841年、『オーロラ』紙で働くためにマンハッタンに出て来ると、ブロードウェイの人出の多い商店街を「ずっとショーウインドウの厚い板ガラスに鼻を押しつけ覗いたり、空の雲を見たりしながら」行き来し、出くわす新しい街路文化に心を躍らせていた。わずか12篇の詩を収めた『草の葉』と題する詩集は1855年に彼がブルックリンで自費出版した作品である。この中で彼が追い求めているものは、影響を受けたエマソンの世界からはみ出た、人間の内の情熱と活力に溢れる「自己」（魂）である。このありのままの「自分自身」が「独り立ちする」ことができれば、アメリカは「民主主義」の価値を実現できる、と熱烈に歌う。もう一つ注目すべきは、ホイットマンはそのアメリカ的なテーマを誰もがわかるように伝統的なロマンテックな詩形を捨て、新しい表現形式で歌い上げていることだ。それは目に従って表現した詩とも言うべきもので、都市街路に見られる日常的な情景、すなわちさまざまな通行人、事物などを無差別に、平等に箇条書きにしていく、いわゆるカタログ手法である。表現の中に、彼の作品のテーマである民主主義の思想がこめられている。カタログ技法は、『草の葉』第3版（1860）以後の詩ではあまり用いられなくなっているにせよ、ほとんど彼だけに見られる独自のものだ。次は『草の葉』第3版の中の「真昼から星明りの夜へ」詩群に入っている「マナハッタ（Mannahatta）」からの引用である。

群衆ひしめく歩道、乗物、ブロードウェイ、女たち、商品と列窓、
 百万の人間—自由で堂々たる態度—屈託のない声—もてなし好き—
 このうえなく勇敢で人なつっこい若者、せわしげに輝きながら水の流れる都会、
 尖塔と帆柱の都会、

入海に巣ごもりした都会、わたしの都会よ。 （杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳）

近代都市の産物である新しい乗り物、様々な商品を陳列する店、ダウントウンの広い散歩道など、一つ一つのを対等に並べて、流入してくる多様な「移民の到着」を歓迎するマンハッタンの民主性を讃えている。若い頃の彼は自分たちの街のさまざまな腐敗（ギャング団、貧民街、路上の喧騒）を嘆き、マンハッタンを「罪悪の都」（Gomorrah）と反応していたことは周知の通り。しかしここでの彼は、マンハッタンを「とても美しい」を意味するインディアンの呼び名「マナハッタ（Mannahatta）」や精浄無垢な魂さながらに「輝きながら流れる都会」、「入海に巣ごもりした都会」というイメージを用いて、いわば民主主義都市の手本としての聖なる都市ニューヨークを描き出しているのだ。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

アメリカス学会第 21 回年次大会（2016 年 11 月 26 日開催）

記念講演（要旨）

日系アメリカ人三世タク・フルモトの語る、日系家族の軌跡

—戦時強制収容・被爆地ヒロシマ・ベトナム戦争従軍—

青木 繁

1. フルモトさんとの出会い

古本武司さんは、第二次戦争中にアメリカ・カリフォルニアにあった日本人戦時強制収容所 ツールレーク（Tule Lake Segregation Center）で生まれ、終戦後は家族と広島で小学校 5 年生までを過ごしている。その後、再びアメリカにもどり、中学、高校、UCLA を卒業、1960 年代後半はベトナム戦争に従軍した。現在は、日系企業、日本人駐在者などを主な顧客に、ニューヨークで不動産会社を設立、成功を収めた経営者である。

古本さんとの出会いは、2015 年、ニューヨークにある日本語国際放送「テレビジャパン」が、戦後 70 周年の特集番組を制作したときであった。テレビでは、家族やご自身の体験を話していただいた。当時、「テレビジャパン」を担当していた私は、日系移民の本を読んだぐらいでその歴史を十分知らなかった。「テレビジャパン」の視聴者は、ほぼ半数が駐在者、そして、残りが日系アメリカ人である。日系人の人々にテレビ番組を毎日届ける仕事をしており、この歴史を更に深く知るべきだったと思った。

1 年後の 2016 年 9 月、二度目のインタビューを古本さんにさせていただく機会に恵まれた。インタビューでは、家族のことや体験をゆっくりと時間をかけ語っていただいた。話が進むにつれ、家族の歴史というだけではなく、日系アメリカ人の生きた証であり、これは日米関係を映し続けた鏡ではないかとも思えた。

また一度、「古本さんは日本人として…」と私が言ったことがあった。その時、「私はアメリカ人ですから…」とすかさず言い返された。流暢な日本語でお話になるので、日本人と話しているような気持になる。古本さんは日系「アメリカ人」である。曾祖父母から引き継ぐ「家」の歴史、「第二次世界大戦」、「収容所」などの体験が、ご自身の生き方にどのような足跡を残し、日系三世の「アメリカ人」となったかその過程にも興味をもった。

2. 古本家の三代の歴史

古本家のアメリカとの関係は、祖父母夫妻がおおよそ 100 年前カリフォルニアへ移住したときから始まる。当時、日本政府は、移民政策を推し進めていた。故郷の広島では「兵隊にゆかねば米国にゆけ」という風潮がみなぎっていたという。1911 年ごろに渡米、始めはサクラメントに近いフローリンに契約農民として落ち着いた。現地では、三人の子供たちも生まれる。

祖父母の時代は、アメリカに「永住」という意識は薄く一時的な「出稼ぎ」と捉え、お金を貯めて日本に帰るという考えであった。15 年が過ぎた 1926 年ごろ、日本への帰国を決めるが、古本さんの父（長男）・清人さんだけはアメリカに残った。15 歳から、契約農民として農場で働いたという。

その後、父・清人さんは 1931 年に結婚、野菜の知識を活かして専門商社をロサンゼルスで共同経営、順調に事業を伸ばしてゆく。

家庭では4人の姉妹も恵まれ生活は安定していた。しかし、日米開戦（1941年12月7日）で生活は一変する。ルーズベルト大統領行政命令第9066号が発令、日本人は収容所生活を余儀なくされる。家族は、会社、車、家財など、すべての財産を失い、1945年ツールレイク収容所で終戦を迎える。

古本さんは、この収容所で1944年10月20日に長男として生まれた。当時のことはほとんど記憶にないというが、親や姉たちは収容所内の国民学校の勉強や体験が、潜在意識の中に深く浸み込んでいるという。日本人の強制収容という出来事は、古本さんの家族にとって消すことができない大きな歴史的出来事であった。アメリカで全てを失った一家は、1946年、敗戦後の故郷広島に戻る。

3. 10年後に家族は再びロサンゼルスで

広島での生活が5年を過ぎたころ、両親はふたたび渡米を計画する。だが、両親は米国籍がなく入国が叶わない。そこで、子供が20歳で親を呼ぶことができるという法律を使い、家族を呼び寄せる作戦を立てた。最後に小学校3年生だった古本さんが渡航したのは1956年、計画から4年の月日が過ぎていた。家族全員がロサンゼルスで再会したとき、父親・清人さんは48歳、裸一貫でもう一度、野菜の販売の仕事を始めた。1950年代のアメリカは、まだ可能性のある時代であった。強制収容で失ったものを、再び取り戻す挑戦であったかもしれない。

その後、古本さんは高校を卒業して、UCLAに入学する。1960年代中旬は、ベトナム戦争でアメリカが揺れ、大学のキャンパスは反戦運動で燃えていた。古本さんは、大学を修了、志願する道を選んだ。たとえば、志願しなくても徴兵が待ち構えている時代であった。

“63年には18歳になり徴兵の登録をしなければいけません。大学に進学すると、2-Sということで猶予を与えられました。しかし、大学に行かなかった何人かはすでに兵隊になっていました。”

ベトナム戦争は、64年にトンキン湾事件、65年からは北爆と激しさを増す。古本さんは士官候補生学校に入学する。

“士官候補生学校は難しく、卒業するには、成績、体力、リーダーシップが必要です。2カ月ごとに成績が悪かったら追い出されます。最初の2カ月は50%。次の2カ月でまた落とされ、最後にまた、20%、30%が落とされトップの人しか残りません。”

ロサンゼルスの中学生の時、真珠湾攻撃の記念日にいつも“ジャップ”と言われ、悔しい思いをした古本さんである。士官候補生学校でも人種差別はあったと言う。しかし、アメリカ人としての自覚は、士官候補生学校の教育を通じ深められてゆく。

“ほとんどが白人で日本人や黒人を下に見下すことがありました。黒人と日本人の私だけが最後の試験で落とされました。学校は能力だといいますが、成績は問題ない。体力も大丈夫。学校のクラスの相互の評価で落とされ、差別だと思いました。…でも、2カ月間のチャンスをもらえました。頑張りました。修了したその時、もうジャップとは言わせないと思いました。これがアメリカ人となった第1番目のステップです。”

ベトナムの戦場では、24時間不安な状況に曝され続けた。兵士たちの中には戦場の恐怖が葛藤を生み、人種差別や薬物で問題を起こし、それが蔓延していったと言う。1971年2月、古本さんはベトナム戦争の最前線から1年後に

帰還する。

“1年間、戦争に行き、生きて帰ってきた時には、本当に嬉しく、その時にアメリカにご奉仕したんだと思いました。戦争からもどり「ブロンズ勲章」を貰った時が、2番目にアメリカ人と感じた瞬間です。その時にアメリカ人になったと思いました。”

その後、アメリカ人としての深い実感を感じたことが首都ワシントンでの式典であった。

“2010年、陸軍第100歩兵大隊、第442連隊戦闘部隊、陸軍情報部などに所属していた帰米二世の人たちが、ゴールドメダル議会名誉黄金勲章を受賞する式典を、ワシントンDCに見にいった時です。私のルーツである日系アメリカ人の道を作ってくれた帰米二世の人たちのこの時の笑顔が忘れられません。もう、こちらに骨を埋めてもいいと思いました。ロサンゼルスには親父の墓がありますが、私もこちらに骨を埋めるでしょう。”

4. 日系人強制収容の問題について、今

古本さんは、家族に大きな影響を与えた強制収容の問題を今はどの様に受け止めているのだろうか。

1988年、レーガン大統領は「日系アメリカ人補償法」に署名し、公式に日系アメリカ人に「強制収容」を謝罪、米国はひとり2万ドルの補償金を生存者に支払った。古本さんも謝罪文書と2万ドルを受け取った。戦争中にアメリカで起きた強制収容の問題は、「国の政策に間違いがあれば、それを憲法のもとに修正する」、古本さんは、アメリカのこの健全な力を信じ、誇りとしている。そして、このことを次の世代に伝えたいと今思っている。

“「これ（収容所）は間違っているのでは

ないですか」と、政府に言った、一世、二世の人たちはすごいと思います。訴えるのは怖い、そういう「ガッツ」がないと、この国はうまく行かないのです。それができるアメリカの憲法が良いのです。…、そういうものがあって初めてこの国が良くなってゆく。われわれは、間違ったことだと謝罪してくれた国のことを次の世代に伝えて行かないといけな。謝罪の背後にはこういうことがあったのだよと。”

では、古本さんの「日本人」のルーツは、今どこにあるのだろうか。日系四世、五世への希望を次のように話す。

“うちの息子は四世だけれど、日本語補習校には行きませんでした。しかし、高等学校に行った時に日本語を習い、大学でも学び、日本の早稲田大学に留学しました。日本の新生銀行では3年間働き、すっかり日本人に染められて帰ってきました。家では日本語を使わなかったのに使うようになりました。ルーツを知りたいという人、ルーツに気づき戻ってくる人は結構います。日本人のルーツに誇りを持ってほしい。”

古本さんの家族の100年の歴史は、日米のその時代ごとの有り様が見え隠れする激動のものである。しかし、そこには歴史を生き抜いた日系人のしたたかな力強さと、変わらぬ誇りがあるように思える。古本さんは、インタビューの最後に、「今日はこれで終わりますが、憲法を守り、原爆のような酷いことがまたないようにと、締めくくりたいです。」と語って終わった。

(NHKコスモメディア・アメリカ元取締役副社長 テレビジャパン担当)

アメリカス学会第 21 回年次大会

研究発表 1 (要旨)

英・米に見られる母音変化

— TRAP 母音を中心に —

山本 晃司

同一言語を使う国でありながら、その言語で分断される…。ここでいう同一言語とは英語であり、分断される国はアメリカとイギリスである。語彙、文法、発音、スペリングにおいていくつかの違いはあるものの、今日において意思疎通が不可能になるほどの状況には至っていない。古くから言われているこの分断説は、近年の文献、例えば、2016 年に第 2 版として出版された *English: One Tongue, Many Voices* の中でも言及されている。この著者である言語学者の Jan Svartvik 氏と Geoffrey Leech 氏は、結論として、英米で使われる英語は同一言語であるとしている。ところが、イングランドとアメリカの一部の地域で起こっている発音変化に注目すると、この分断説がまったくもって荒唐無稽であるとは言えない状況になりつつある。

1. Received Pronunciation (RP) と General American (GA) における TRAP 母音

イングランドでは Received Pronunciation (RP)、アメリカでは General American (GA) が標準的な発音とされている。RP では Theresa May 氏、GA では Hillary Clinton 氏がその代表的な話者として挙げられる。両者の発音を比較すると、子音の典型的な違いとして、May 氏は母音の後の /r/ を発音しないのに対し、Clinton 氏はどの音声環境下であっても発音するという違いがある。母音に関してもいくつか違いが見られる。発音表記上から明らかに異なるものもあれば、同一の記号を使ってい

ながら、実際は異なる音質の母音もある。特に、*trap, bad, cat* などの語で使われる /æ/ では、両変種に大きな隔たりがある。May 氏は母音基準 [a] に近い音、つまり、口の開きが広い音質であるのに対し、Clinton 氏はやや狭い音質となっている。

2. 揺れ動く trap 母音

かつての RP と GA を比較すると、/æ/ の音質に何が起きているのかを知ることができる。古いタイプの RP 話者として音声学者の Daniel Jones 氏と言語学者の John Firth 氏を、GA 話者として第 29 代アメリカ大統領の Warren Gamaliel Harding 氏の /æ/ を比較、分析した結果、かつての RP は母音基準 [ɛ] に近い音質であったが、GA は近年とさほど変わらない音質となった。そのため、GA の /æ/ は常に安定した状態にあるかのような印象を受ける。しかしながら、GA の起源とされるアメリカ北部の数都市に注目すると、事態は大きく変わろうとしている。

3. 北米諸都市母音推移

アメリカ北部の諸都市（シカゴ、クリーブランド、デトロイト、バッファロー、ロチェスター）では、単母音に大きな変化が起こっている。これは北米諸都市母音推移と呼ばれ、変化が起こっているその単母音は、ペンシルベニア大学の教授 William Labov (*Principles of linguistic change: Volumes. 1-3*, Oxford: Wiley Blackwell) によると、特に、/ɪ/, /e/, /æ/, /ɔ/, /ɑ:/, /ɔ:/ であるという。拙稿で取り上げている /æ/ についていえば、その音質が [ɛ] に近付きつつあるとされている。実際、Labov 氏がサンプル音声として挙げているアメリカ北部在住の女性の音声进行分析すると、/æ/ は二重母音化を起こし、その出だしの音質は [ɛ] となってい

る。先に挙げた6つの母音のうち、どの母音が発端となって一連の推移が起こっているかは現在も議論中ではあるが、GAの母体とされるこれらの諸都市での変化により、GAにどのような影響をもたらされるかは更なる観察が必要となる。

4. 時計回り・反時計回りの変化

イングランドとアメリカで起こっている /æ/ を中心とした前舌母音での変化から、その移動方向にも違いが生まれている。アメリカは、英語の音韻体系に大きな影響を及ぼした大母音推移の流れに沿った伝統的な時計回りの推移であるのに対し、イングランドでは、その流れに反した反時計回りの動きとなっている。このような違いを引き起こす要因とは何か。この点についても調査していきたいところである。

(天理大学国際学部専任講師)

研究発表2 (要旨)

メキシコにおける1990年代の選挙競争

吉野 達也

トランプ大統領が2017年1月20日に就任して以来、メキシコへの強硬な外交により米国とメキシコ間の緊張は高まりつつある。またこの数年、市民のメキシコ政治に対する失望感が高く、「メキシコには民主主義などない」と皮肉を込めながら言い切る人々も多く見受けられる。現在メキシコの政治体制が変わった大きな出来事を挙げる際、一般的に2000年の制度的革命党(以下PRI)から国民行動党(以下PAN)への政権交代を扱う場合が多い。しかし1990年代からすでにPRIの単一党優位体制は大きく揺るぎはじめ、国政選挙においても徐々に野党の台頭が見られ始め

た。本発表は野党の台頭、いわゆる選挙競争を主たる議題とした。

1. メキシコの政治的性格、PRIの単一党優位体制

ラテンアメリカ諸国は、ほとんどの国で20世紀後半には民主化を実現している。このため昨今、同地域での政治学研究の対象は各国の法の支配、主権や平等などといった民主主義の質に重きを置く傾向にある。

メキシコは1940年代以降、選挙が定期的に行われ、文民政府が国家を統治してきたため、当初その内部にある非民主的な性格に焦点があてられることはなかった。1970年代に入ると、米国やメキシコの研究者が、政府関係者の間で内在する汚職やクライエントリズム、そしてPRI政権の権威主義的性格を指摘するようになった。PRIは長きにわたる経済成長により国民への再分配で安定した政権運営を行えたが、1970年以降はオイルショックによる特需を除いて長きにわたり経済が停滞し、1982年の通貨危機をきっかけにPRIによる権威主義体制は弱体化し、政治的混乱を招いた。

PRIは国政選挙においてはほぼすべての議席を獲得してきた。例えば1982年の選挙であれば、下院議員選挙では小選挙区で全300議席中、PRIは299議席(総得票率の99%)を獲得した。1988年の選挙ではPRIの議席数は233議席(総得票率の73%)で、当時最大野党であったPANはこの選挙で33議席(総得票率の13%)を獲得し、野党が徐々に躍進しはじめ、議席の拮抗が見られた。

このように1980年代後半からPRIの単一党優位体制に変化が現れた。透明性や公平性を担保された選挙実施によって候補者間や政党間の選挙競争が維持されているかという点

は、その国の民主主義を考慮する上でも極めて重要な項目であると言える。そこでメキシコの選挙競争のレベルがどのような経緯で向上したかを考察した。

2. 選挙競争が活発になった要因

1980年代から1990年代におけるメキシコの地方における民主化（野党台頭）を説明できる要因として、1. PRI 支持の弱体化 2. 選挙改革の実践 3. 民衆による権威主義への牽制という3点を挙げた。

PRIの弱体化に関しては、前述のとおり1982年の債務危機によって国家による再分配は縮小した。その結果これまでコーポラティズムによってPRIの支持基盤を形成していた労働者や農民の生活状況は悪化する。再分配の仕組みの崩壊はPRI政権に決定的な影響を与えたと言える。

選挙改革の実施に関しては、1960年代から選挙改革は定期的実施されてきたが、1980年代までの選挙改革の内容は公正な選挙の実施が目的というよりも、PRIが選挙プロセスや選挙結果に改革を通じてより影響力を確保したいという意図があった。したがって選挙改革を経ても選挙の公平性が担保されていない点が問題視されていた。

1990年代の一連の選挙改革では連邦選挙機関（IFE）の創設により、選挙の公正さと透明性の向上が図られ、そして1996年の選挙改革では、選挙競争における新しい規則（各党の公平なメディアへのアクセス、政党の財務）、選挙議席に関する変更（一党が確保できる最大議席が315から300に）、メキシコシティ市長の公選、選挙における司法の新しい役割（最高裁判所が選挙紛争の解決に寄与）、連邦主義（脱中央集権）に向けた改革が盛り込まれた。

民衆による権威主義への牽制としては、1980年代に次々と発覚したPRIの汚職や、選挙における不正疑惑によって国民による権威主義への反発がより顕著となり、さらにPRIは都市部に住む中産階級の支持を失い、結果として国政選挙や地方選挙において野党が躍進する事となった。特に州や自治体レベルにおいて、政治腐敗や権威主義への不満に対して政治アクターや住民のあらゆる運動として形に現れると、選挙結果にも影響を与えはじめた。

2000年の政権交代直前に行われた1997年の中間選挙では、下院選挙においてPRIが164議席（総得票率の55%）、PANが62議席（総得票率の21%）、民主革命党PRDが71議席（総得票率の24%）を獲得した。同時期に実施されたメキシコシティの市長選挙ではPRDが勝利した。

3. おわりに

以上のように当発表ではPRIの単党優位体制の弱体化のプロセス、および1990年代のメキシコにおける選挙競争を説明する手段として、再分配のシステムの崩壊によるPRI支持基盤の弱体化、1990年代に行われた大規模な選挙改革、1990年代に顕著となった国民の権威主義への牽制が選挙競争の活発化の一因となった点について考察した。

今後はメキシコの選挙競争を国家レベル、地域レベルの両面から考察し、メキシコにおける政党システムの変化がどのように起こったのかを実証的に証明したい。

（大阪経済大学非常勤講師）

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」を外国語学科英米語専攻と地域文化学科アメリカス研究コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれた上記各教員・卒業生が参列したクラス会の席上挙行され、以下の受賞者2人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1990年3月に天理大学旧外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志半ばにて白血病で亡くなった酒本真理子さんの名前を冠して創設された賞である。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂戴しているが、その一部を「酒本真理子賞」として毎年卒業式当日授与している。

外国語学科英米語専攻：大藪光俊

「旧約聖書『レビ記』における障害者観に関する一考察」

地域文化学科アメリカス研究コース：武内元樹

「米国における人種とスポーツ—差別と闘う黒人アスリート—」

2017年度アメリカス学会の活動予定

◇定例研究会：7月8日（土）

恒例の天理大学アメリカス学会の2017年度定例研究会は、7月8日（土）午後2時から天理大学研究棟3階の第2会議室にて開催します。研究発表予定者および発表タイトルは以下の通り。

研究発表① デビッド・ホプキンズ氏（天理大学国際学部地域文化学科准教授）：

「アメリカン・ジャズにおけるラテン音楽の影響—戦後とポップ誕生以降の動向を中心に—」

研究発表② 北森絵里氏（天理大学国際学部地域文化学科教授）：

「リオデジャネイロのサンバ＝レゲエスラム街の文化活動の事例—」（仮題）

◇第22回年次大会を本年12月2日に開催予定

天理大学アメリカス学会の第22回年次大会を、本年12月2日に天理大学研究棟3階の1会議室にて開催予定。「ブラジルの中のアフリカ」（仮題）

というタイトルでシンポジウムを開催予定。

昨年度後半の活動

◇第21回年次大会を昨年11月26日に開催

恒例の第21回天理大学アメリカス学会年次大会は、昨年11月26日に天理大学研究棟第1会議室で開催され、NHKコスモメディア・アメリカ元取締役副社長の青木繁氏が、「日系アメリカ人三世タク・フルモトの語る日系家族の軌跡—戦時強制収容・被爆地ヒロシマ・ベトナム戦争従軍—」と題して、記念講演を行った。また山本晃司氏（天理大学国際学部外国語学科英米語専攻専任講師）が「英・米に見られる母音変化—TRAP母音を中心に—」の題目で、また、吉野達也氏（大阪経済大学非常勤講師）が「メキシコにおける1990年代の選挙競争」の題目で、それぞれ研究発表を行った。記念講演と研究発表の要旨は、このニューズレター6～11頁を参照。

☆天理大学アメリカス学会の2017年会計年度は、昨年11月26日に開催の年次大会当日にスタートしました。2017年度の年会費（一般会員：5,000円、賛助会員：1口30,000円）を未納の会員の皆様は、昨年12月にお届けした『アメリカス研究』第21号に同封しました郵便振込取扱票にて指定口座（下記参照）宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。郵便振込取扱票を紛失された方も下記の郵便振込口座番号宛にてお願いします。

口座番号：00900-5-70364

加入者名：天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 76：2017年6月5日発行)

発行者：木下民生

〒632-8510 天理市杉之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/